スープ嫌い

小出　あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スープ嫌い

【Ｎコード】
Ｎ４２３９Ｃ

【作者名】
小出　あかり

【あらすじ】
食卓にスープが並ばなければ気が済まない主人公・梨々子。ある日の食卓で、恋人が『スープ嫌い』であることが判明する。２人の食卓には、嵐が待ち受けていた・・・。

今日のスープは、トマトのポタージュ。独特の酸味、とろりとした触感。梨々子は熱いスープを飲んで、ホッと一息ついていた。
うん、いい感じ。
我ながら、今日もいい味だ。
目の前にすわる彼氏の聡一に、梨々子は何げない言葉を投げかけた。
「スープを飲むと、ごはん食べたって気がするよね」
しかし聡一からは、何のコメントもない。
テレビ画面に釘付けだった。
ニュースのプロ野球速報に耳を傾けながら、ご飯にのせためんたいこをつついている聡一は、梨々子の方さえ見向きもしない。
やがてテレビはＣＭに入り、しばらくしてから聡一が振り向いた。
「え？　何？　何か言った？」
梨々子はちょうど、サバの塩焼きをつついていたところだった。
そして数分前、自分が言ったことすら忘れかけていた。
「何が？」と梨々子。
聡一はまた聞いた。
「何か言わなかった？　スープがどうとか」
梨々子は自分の言ったことを思い出そうと、記憶の断片を拾いはじめた。しかし、やっぱり何を言ったのか思い出せない。
別にたいしたことじゃない。
ただ、何となく言っただけだ。
どうせ、忘れるようなことなのだ。
かわりに梨々子は、別のことを言うことにした。
「聡一はさ、どんなスープが好きなの？」
「えっ？」
聡一の手が止まる。

「うーん……」
ひとしきり悩んだ末、聡一はご飯の上のめんたいこをもてあそびながら、こう言った。
「僕さ、ネコ舌なんだよね」
梨々子は驚いて聡一を見る。
「そんなこと、聞いたことないよ？　聡一がネコ舌なんて」
聡一は首をかしげて笑った。
「あれ？　知らなかった？　だから鍋焼きうどんも苦手なんだ」
初めて知った、恋人の新事実。
梨々子は思った。2年も付き合っていて、聡一の何を見ていたんだろう？
梨々子はつぶやいた。
「そうか、熱いのが苦手なんだ」
梨々子は、頭の中で考えをめぐらせていた。
今度の晩ごはんには、冷たいスープを作ろう。ジャガイモのポタージュ、コンソメスープ、トマトのスープ、ほうれん草の緑のスープ。梨々子の頭の中には、さまざまなレシピが浮かんだ。
そして……。
そうだ、ニンジンにしよう！
梨々子は決めた。
暑い夏には、これが一番。不足しがちな緑黄色野菜も、これでバッチリ摂取ね。
梨々子は、聡一を見てニッコリ笑う。
「？　なんだよ？」
聡一は、イミが分からない、といった表情で梨々子を見返した。

梨々子はスープが大好きだ。
一番好きなのは『味噌汁』。日本食が好きな梨々子は、味噌汁が大好きだった。特に好きなのは、豆腐とネギの具が入ったカツオだしの赤味噌。タケノコとワカメの組み合わせも大好物だ。

そして二番目に好きなのはポタージュスープ。ポターシュならカボチャだろうが、トウモロコシだろうが、何でも来い、という感じだった。

梨々子は何でもかんでもミキサーにかけては、ポタージュスープにしてしまう。最近は、牛乳のかわりに豆乳でつくるのがマイブームだった。

スープは梨々子にとって、『癒し』だった。

スープがあるのは、『あたりまえ』。

スープのない食事など、翼のない扇風機だと、梨々子は思っていた。

今は夕方。

『晩ごはん』のために、梨々子は料理の下ごしらえをしていた。

今、ニンジンを鍋でゆでている。

まだ、もう少し時間がかかりそうだ。

そのとき、玄関のチャイムが鳴った。

「梨々子、いる？」

聡一だった。

ガチャリと鍵をあけた梨々子は、入り口に立つ聡一に言う。

「合い鍵持ってるんだから、チャイム鳴らさなくていいよ」

そして梨々子は、もう一言つけ加えた。

「ウチに来るの、早くない？」

聡一は、梨々子のアパートの近所に住んでいるのだ。いつしか聡一は、晩ごはんのたびに、梨々子の家に上がり込むようになっていた。そしてその状況はエスカレートしていき、最近では梨々子がいなくても、部屋に勝手にあがりこむことも多くなっていた。

聡一のお目当てはゲームだ。

ついこの間、梨々子は新型ゲーム機を買った。今聡一は梨々子が買ってきたＲＰＧで遊んでいる。梨々子のメモリの隙間には、聡一のデータがこっそりセーブされており、聡一は毎日ちょっとずつ遊んでは、キャラを育てていた。

梨々子がバイトでいない時、聡一はゲームをする為に家にあがりこみ、そして一人でゲームをして帰るのだった。梨々子はそれを容認していた。梨々子と聡一は、そんな仲なのだ。
遊んでいる聡一の背中に向かい、梨々子が呼びかけた。
「今日は、特別メニューだよ」
「ああ、もしかして肉料理？」
聡一が、妙にうれしそうに聞いた。
「バカ。ダイエット中で金欠の私が、肉なんか買ってくるわけないでしょ」
「へえぇ、じゃあ何？」
「冷たいスープだよ」
それを聞いた聡一は、梨々子の方を振り返り、顔をゆがめて言った。
「えっ？　スープ？」
そして聡一は、
「あのさ、梨々子。僕は冷たすぎるのも苦手なんだ」と言った。
梨々子の手が止まる。
「冷たいのも、ダメなの？」
今しがたミキサーですり潰したばかりのニンジンを見つめながら、梨々子は言った。
「じゃあ、冷蔵庫で冷やすのはやめにする」
そしてかわりに冷蔵庫を開けて、中から魚のパックを取り出した。
「じゃあこれから、塩ジャケでも焼こうっと」

そして、晩ごはん本番。
昨日と同じように、テレビではニュースが流れ、食卓には2人分の皿が並んだ。
メインは焼きジャケ。その他に、納豆、トマトとコーンのサラダなどが並ぶ。そして塩ジャケの横には、生ぬるいニンジンのポタージュスープ。

梨々子はスープを一口口に含んで、そしてつぶやいた。
「うへええっ、ちょっと生っぽくない？　このスープ」
「ニンジンは茹でたんだろ？」と聡一。
「そうじゃなくって」
梨々子は聡一に向かって、力説しはじめた。
「なんかさ、冷たい、とか熱い、とかハッキリしてよって感じなんだよね。私こういう中途半端って、キライなんだよね」
すると聡一は、納豆を皿の中でかき混ぜながら言った。
「じゃあさ、スープ、梨々子一人で飲んでいいよ」
梨々子は目を丸くする。
「なんで？　どういうこと？」
聡一は言った。
「だからさぁ、冷たいのでも熱いのでも、梨々子は好きなスープを飲めばいいよ」
そこで、初めて気が付いた。
何てバカだったんだろう？　今まで気付かなかったなんて……。
そう梨々子は思った。
そして梨々子は、聡一に恐る恐る核心に迫る質問をすることにした。
「もしかして、聡一はスープがあまり好きじゃないの？」
聡一はヘラッと笑って答えた。
「ハハッ、実はそうなんだ」
ちょっとムッとした顔で、梨々子は聡一に喰ってかかった。
「じゃあ、ネコ舌っていうのはウソ？」
「ウソじゃないよ。僕は正真正銘のネコ舌だ」
「冷たいのが苦手っていうのは？」
「それもウソじゃないよ。要するに極端な温度差についていけない体質なんだ」
梨々子は頭の中を、必死に整理しようとして、もう一度聡一にたずねた。

「ということはつまり、ネコ舌で熱いのが苦手だから、スープもキライってことなの？」
聡一は照れたように、頭をかいた。
「まぁ……そういうことになるのかな」
その次の瞬間、聡一がいきなり大声を出した。
おおっと！
梨々子が驚いて聡一を見ると、聡一はもはや梨々子を見ていない。聡一の先には、テレビの画面。
「スポーツニュースがはじまる！」
そして聡一は、テレビを食い入るように見始めた。何か話しかけようか、と一瞬思った梨々子だったが、すぐに口を閉じた。梨々子は完全においてけぼりを喰らっていた。
一人寂しく塩ジャケをつつく梨々子。
やがて梨々子は、一人の世界に没頭していく。先程の一件を思い出し、梨々子は頭を悩ませはじめた。
ああ、まさか聡一が『スープ嫌い』だなんて。だけど私は、ご飯にスープは欠かせない。スープはあって当たり前のもので、食べないと『ごはん』を食べた気になれない……。
結果、梨々子は自分なりの回答を導き出した。
聡一も一人でスープを飲んでいいと言っているんだもの。明日からは、私の分だけスープを作ろう。嫌いだという人に、ムリに飲んでもらう必要はないわ。面倒でも、そうしよう。
梨々子がぼんやりそんなことを思っていた時、聡一はまだ、スポーツニュースに夢中だった。仕方なく、梨々子は再び塩ジャケをつつきはじめた。夕食はまだ、終わりそうになかった。

聡一は、スープが嫌い。
梨々子はスープなしではいられない。
だから、梨々子だけがスープを飲み、聡一にはスープを出さないというのは、一見理にかなっていた。それで2人の溝は埋まり、大

団円になるはずだった。
ところがコトは、そう簡単には終わらなかった。
しばらくすると、聡一が梨々子に不平を漏らすようになったのだ。
「これじゃあ、お腹一杯にならないよ」
ある晩ごはんの最中に、聡一がいきなり言い出した。
「梨々子、いい？　理屈で考えてみてよ。食卓に並ぶ皿が一品減ったんだ。その分今までより、食べる量が減るってことだよね」
梨々子は、うんざりした顔をした。
「またその話？　聡一もダイエットすればいいじゃない。だいたいスープはいらないと言ったのは、聡一自身でしょ」
聡一も反論する。
「でもさ、僕はダイエットしなくたって平気だよ。誰も僕のことなんか気にしてないし。そんなことより、僕は空腹が満たされたいんだ。お腹いっぱい食べたいんだよ」
聡一は梨々子に手を合わせた。
「なぁ、この通り。もう一品おかずを何か増やしてくれよ」
「ヤだ」と梨々子。
「だいたい、体重も身長も違うんだぜ。男の僕が、梨々子より多くものを食べるのは当たり前じゃないか」と聡一。
「ばーか」と梨々子。そして言った。
「そんなにお腹がすいてしょうがないんなら、自分用に『おそうざい』を買って来ればいいでしょ。私はもう、面倒見ないからね！」
梨々子にきっぱりと断られ、聡一はいつになく情けない顔で梨々子を見た。そして言った
「じゃあせめて、飯のおかわりくれよ」
「自分でよそったらいいじゃない」
梨々子は冷たく突っぱねた。
テレビではスポーツニュースが始まった。しかし聡一はそれすら気付かぬ様子だった。
今日のおかずはタラのみそ漬け。梨々子は白身魚をつついては、

それを口に放り込んだ。　聡一は自分のカラになった皿を、うらめしそうに眺めていた。やがてふとテレビに目をやった聡一は、しばらくすると野球のハイライトシーンに夢中になりだした。そして、先程のやりとりすら、忘れてしまったようだった。

ハハッ、子供なんだから。

梨々子は心の中で笑った。

やがてニュースが終わる頃、その日の晩ごはんは終わった。

梨々子は後片づけをはじめ、聡一はゲーム機に電源をいれた。ひとしきり遊んだ後、聡一は帰り支度をはじめた。しかしその間中、梨々子とは言葉を交わさなかった。そして黙って帰っていった。

あれから2日が過ぎた。

昨日梨々子は、電気量販店でバイトをしていた。だから聡一とは顔を合わせていない。学校でも見かけなかった。

電話をしようか、とも思ったが、なんとなくかけそびれ、そして何となく時間だけが過ぎてしまった。

2日間が経つうち、梨々子は少しだけ反省モードに入っていった。

聡一にヒドいことをしちゃったかもしれないな。明日、あやまろう。

だが、梨々子は相変わらず料理を一品増やす気にはなれなかった。だいたい聡一は、料理をなめている。その手間も、時間も、食材代も。何一つ分かっていない。

そこで梨々子は、素直に、いかに料理が大変かを聡一に訴える作戦に出ることにした。　心を込めれば、聡一にだって伝わるはず。

ああ、これで全て丸くおさまってくれればいいな、と梨々子は思った。

そして夕食の時間が近づき、いつも通り聡一がやって来た。

聡一は相変わらず早い時間に来て、ゲームするつもりのようだった。

ピンポーン。

チャイムが鳴り、梨々子が玄関のドアを開ける。
扉を開けたとたん、揚げ物の、ふんわりとした香ばしい香りが漂ってきた。
もしや……。
梨々子は聡一に聞いた。
「それ……。その匂い……」
「ああ、心配しないで。僕の一品分しか買ってきてないから」と聡一。
「コロッケ？」と梨々子。
「ぶぶー。今日はメンチカツ」
そして聡一は、嬉しそうに話をはじめた。「ここに来る途中に、肉屋があるでしょ、『長谷川』っていう。そこを通るたびに、いい匂いがするんだよね。いつか一度揚げたてを買ってみたかったんだ」
梨々子はムッとした顔でつぶやいた。
「あの肉屋のコロッケは、私も大好きなのよ」
「だからコロッケじゃなくて、メンチカツだってば」
「私はメンチカツも好きなの！」
梨々子は腹立たしかった。
むしょうに何かに当たりたい気分だった。　まるで頭の中に、毒の沼地が広がっていくかのようだ。そしてそれを、鉄の棒でぐるぐるかき回しているかのようだった。

その日の夕食は険悪だった。
梨々子は一言もしゃべらずに箸をすすめ、聡一は梨々子にちらちらと視線を送りながらも、何を話していいか分からず、小さくなっていた。今日はテレビもついていない。無音の食卓。
やがて聡一が口を開いた。
「あのさ」
「何？」梨々子が聡一をにらむ。
「メンチカツ、半分いる？」

おずおずと訊ねる聡一。
すると今までムッツリしていた梨々子の顔が、急にほころんだ。
「いるいる」
聡一は、メンチカツを半分に切り分けながら言った。
「ゲンキンだなぁ、梨々子は」
そして半分に切ったメンチカツの半分を、梨々子のご飯茶碗の上に、ドンとのせた。
「ソースいる？」
「うん、いるいる」
聡一が、お総菜用のソースパックを取り出し、パックの口を切って、梨々子のコロッケの上にソースをかけた。梨々子は茶碗の上のメンチカツをさらに小さく切り分けて、その一つをとり口に放り込んだ。
「やっぱり、あそこの肉屋のは、最高だね」
「うん」
「メンチカツもいいけどね、コロッケもいいんだよ」
「うん」
聡一は、もぐもぐと口を動かしながら言った。
「それはそうとして、どうしようかな。これから」
「何のこと？」梨々子が聞いた。
「お総菜」
「お総菜？」
聡一はメンチカツを食べながら言った。
「だってさ、おかずが足りないからメンチカツを買ってきたのに、梨々子がむくれるんだもんな」
梨々子は反論した。
「だって、コロッケ好きなんだもん」
「メンチカツだよ」
「メンチカツも好きなの！」
聡一は言った。

「そもそも、もう一品欲しいなら自分で買え、って言ったのは梨々子じゃないか」
「だって、目の前にドン、と出されたら、私だって食べたくなるよ」
溜息をつく聡一。
「ま、いっか。なるようになれ、だ」
聡一は言った。
「でも、梨々子の機嫌が治って良かったよ」
「聡一の機嫌もね」
そして笑顔になった梨々子が、テレビのスイッチを入れる。
テレビでは、ちょうどスポーツニュースがはじまるところだった。

それから数日が経った。
聡一は相変わらず、夕食のたびに自分の分だけ『お総菜』を買ってきた。エビフライ、肉じゃが、春巻き、ギョウザ、シュウマイ、肉団子、などなど。日替わりで様々なお総菜が食卓に並んだ。それらは、聡一の前にだけ並び、梨々子はそれを見て、いつもむくれた。
なにしろ普段は質素な食卓だ。健康を心がけ、梨々子が野菜の多い、魚メインの献立を立てたがるからだ。しかし聡一ときたら、匂いの強い、揚げ物や肉ばかり持ってくる。これはまるで梨々子にとっては拷問だった。
梨々子がムッとするのを見て、最後には聡一が折れた。そして聡一は惣菜を半分に割った。毎日はそれの繰り返しだった。
夕食時。
梨々子と聡一は向き合って「いただきます」と言った。
今日聡一が買ってきたのは、エビチリだ。
これまた梨々子の大好物だった。
「……」
いつものように、梨々子からの無言の圧力を感じた聡一は、ちょっと意地悪な口調で言った。
「食べたいの？」

こくこく。梨々子は何度もうなずいた。
「分かったよ。半分食べていいよ」
聡一がエビチリの中央に、箸で線を引いた。梨々子は嬉しそうに、エビチリを箸ですくった。
「いただきまーす」
そして2口目。梨々子は思わず、食べてはいけない領域にまで、手を伸ばしてしまった。「あ！」
聡一は見ていた。梨々子は聡一のブーイングを受けることになってしまった。
「半分ずつって言ったじゃないか。そもそもこれは、僕の『お総菜』だよ」
「えー。だって……」
梨々子は口をとがらせた。
「聡一には愛がないのね。こういう時、黙って見逃すのが本当の愛よ」
「『お総菜』を半分あげるのは、愛じゃないのかよ」
聡一は溜息をつき、そしてこう切り出した。
「あのさ、前々から言おうと思っていたんだけどさ」
真顔で話しはじめる聡一に、梨々子の箸は自然と止まる。
「そもそも僕は、僕の分の『お総菜』を、自分の食べる分量だけ買っているんだ」
なーんだ、そのことか。梨々子は心の中で思った。
「だけど僕の分を、梨々子は食べてしまう。それじゃあやっぱり僕のお腹は満たされない」
「つまり？」梨々子は聞いた。
「梨々子もお総菜が欲しいってこと？」
聡一が聞いた。
ズバリ言われた梨々子は、ドキッとした。そして、煮え切らない様子で言い訳をはじめた。
「そういう訳じゃないんだ。私はただ、目の前でおいしいものを、

他人が食べているのを見るのがイヤなだけなの。そうよ、本当はお総菜なんか……」
「食べたくないってこと？」と聡一。
うーん……。
梨々子は悩んだ。
「やっぱりさ、1人分だけ買ってくるってのは、ダメだよ。平等じゃないよ」
「だけど、僕はスープを飲んでないよ」
聡一が言った。
「そもそもお総菜は、スープの代わりじゃないか」
梨々子は必死で反論する。
「お総菜はスープの代わりになんか、ならないよ。だって、『お総菜』と『スープ』のおいしさは、ベクトルが同じじゃないんだもん」
聡一は、再び溜息をついた。
「分かった。『お総菜』、今度から2人分買ってくるようにする。2人とも幸せなら、それでいいや」
聡一が、最後に折れた。
梨々子は複雑な気分だった。
本当のことを言うと、『お総菜』のせいで、お腹は一杯一杯だった。目の前にあれば、おいしそうなので食べたい。だけど、それを食べれば、お腹は腹八分目を越えて、満腹状態になってしまう。
今はまだいい。
1個のコロッケを半分に割っているうちは。
だがこれからは、『一人前』。コロッケなら1個。唐揚げなら2個3個。確実に食べる量は、今より増える。
それは健康にも、体重的にも、あまりいい状態とは言えなかった。
だが、聡一にはそのことを言い出せず、梨々子は黙りこんでしまった。
いいのか？
本当にいいのか？

そんな言葉が梨々子の頭の中を、行ったり来たりした。
だが、これで大団円だと梨々子は思った。
もう終わり。
これで食卓に平和が戻ると、梨々子は信じることにした。必死に信じ込もうとしていた。

「太ったね」
聡一はあっさり言う。
しかもストレートに。
この男、女心を知らなすぎると、梨々子は思った。
あれから1ヶ月。梨々子の体重は徐々に増え始めた。そして確実に、目に見える形であらわれ始めた。
ああ、バカだ。私は馬鹿だ。馬鹿者だ。誘惑に負け続けた結果が、こんな形であらわれてしまうなんて……。
梨々子は急に悲しくなった。引き金を引いたのは、聡一の言葉だ。聡一にも見える形で「太った」ことが、悲しかった。梨々子は思わず聡一に愚痴をこぼしはじめた。
「そんなに率直に言うこと、ないでしょ。分かってたわよ。私だってそうなることぐらい。でもさ、でも……」
愛がないよ、聡一は。
そう言おうと思って、梨々子は口を閉ざした。
そうだ。
そもそも、スープのせいだ。
スープを「飲む」、「飲まない」からはじまり、その結果は、なんだかサイアクな方向へ進んでしまった。だけどこのまま続けば、もっと悪い方向へ……確実に体重は増えていくだろう。
どこかでブレーキをかけないと。
でも、どうやって？
夕食を変えないと、多分何も変わらない。でも、いい方法なんてこれ以上思いつかない。

梨々子の頭は、回らなかった。何も、思いつかなかった。
ふと、聡一が梨々子の頬に手をやった。
「泣くなよ」
聡一はそして、梨々子を抱きしめた。
「バカだなぁ。こんなことぐらいで泣くなんて」
「なんでよ？」抱きしめられながら、梨々子は怒った。
「『こんなことぐらい』と思っているの？　ヒドイ。太ったのは私よ！」
すると聡一は梨々子の頭をなでではじめた。
「梨々子は一人で、いろいろ悩んでいたんだね。僕は知らなかったんだ」
そして梨々子を抱きしめたまま、聡一は言った。
「……そうだ、2人で何か、いい方法を見つけよう」
聡一は続けた。
「まずは『お総菜』を買うのをやめよう。それから……」
「それから？」と梨々子。
「それから梨々子は1人でスープを飲むのをやめる」と聡一。梨々子が驚いて聡一を見ると、聡一は梨々子を見て微笑んだ。
「僕もね、また梨々子のスープを飲むことにするよ」
「えっ、何で？」
梨々子は聞いた。
「だって、スープは嫌いなんでしょ」
「うん。だからスープを出された時は、最後に飲んでいたんだ。ネコ舌でも大丈夫なように」
そして聡一は言った。
「スープはそんなに好きじゃないけど、梨々子は大好きだよ。だから、梨々子のつくったスープも大好きなんだ」
「ありがとう」
梨々子は、泣き笑いをしながら聡一を見た。すると聡一は、
「でもね、1つだけ言いたいことがあるんだよ」と言った。

「何？」
聡一が真面目な顔で梨々子を見るので、梨々子はドキリとした。2人の距離が近すぎるのだ。梨々子も聡一を見つめる。そして言葉を待った。
聡一が口を開いた。
「そのう……。焼き魚にポタージュスープは似合わないと思うんだ。焼き魚には『味噌汁』がいいと思うよ」
梨々子は思わず吹き出した。
「私もね、本当はそう思っていたんだ」
「じゃあ、今度の夕食には、『味噌汁』を作ってよ。具はね、キャベツとジャガイモがいいよ」聡一が言った。
それを聞いた梨々子が、言い返す。
「邪道よ。キャベツとジャガイモなんて。やっぱり『味噌汁』は豆腐とネギよ」
2人は笑った。
今日こそは、大団円だと梨々子は思った。
さて。
今日の『晩ごはん』は、何にしよう？
だが、スープだけは決まっている。『味噌汁』だ。具は冷蔵庫と相談して後で決めよう。
梨々子の頭の中は、今日の晩ごはんのことで一杯になった。頭の中で、様々なおかずレシピが浮かびはじめた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4239c/

スープ嫌い

2010年10月8日15時19分発行